山口大学教育学部研究論叢　第 72 巻　299 頁～ 304 頁　2023 年 1 月

山口県若年層の用いる同意要求表現 ンジャナイ・（ッ）ポクナイ・クナイについて
－〈発見〉場面における用法を中心に－

黒崎　貴史 *・有元　光彦 **

On the Expression of Agree to Request “njanai”,“(p)pokunai” and “kunai” Used by Young People in Yamaguchi Prefecture
－ Focusing on Usage in Context of “Discovery” －

KUROSAKI Takashi*, ARIMOTO Mitsuhiko**

（Received September 22, 2022）

山口県若年層の用いる同意要求表現ンジャナイ・（ッ）ポクナイ・クナイについて、〈発見〉場面における用法の異同を明らかにした。クナイは話し手の方が聞き手より情報量を多く持っている場面で使用され、ンジャナイと（ッ）ポクナイは両者の持つ情報量が同等な場面で使用される。しかし、ンジャナイは発話場面にいる話し手と聞き手以外の周縁者との情報共有が可能な場面で用いられやすく、（ッ）ポクナイはそれができない場面で用いられやすいという違いがある。また、ンジャナイは話し手の判断の根拠が十分と言えない場面で、（ッ）ポクナイは十分と言える場面で用いられやすい。クナイは話し手だけが探索物を視認し、主観的な判断で強い確信を持って用いられる。

１．はじめに[1]

若年層において、（１）のような「クナイ」という文末形式を用いた発話が見られる。

（１）冷蔵庫にバナナあるくない？

クナイは、二重否定形式「ナ（ン）クナイ」の「クナイ」が独立したものと考えられ、聞き手に同意を求める用法で用いられることが多い（cf.平塚 2009、高木 2009、黒崎 2021）。

黒崎（2021）においては、山口県若年層を対象に、黒崎・有元（2021）においては、福岡県・大阪府・福井県若年層を対象にクナイの使用実態について調査を行った。その中で、「（ッ）ポクナイ」という否定疑問形式との比較について考察した。その結果、（ッ）ポクナイが使用できる文でもクナイが容認されることがわかった。また、形容動詞語幹との共起において、クナイよりンジャナイの方が選ばれやすいことも確認できた。これには、国立国語研究所（1993）の指摘にあるように、調査地域においては形容動詞の否定形としてジャナイが伝統的に存在することに原因があると考える。

このように、クナイは、（ッ）ポクナイやンジャナイといった同意要求表現との競合が見られるが、これらの用法がどのように異なるのかについては十分な考察が得られていない。

そこで本稿では、山口県若年層を対象に、文末形式クナイ・ンジャナイ・（ッ）ポクナイの使用実態を調査し、用法の異同について分析を行う。なお、本稿では、発見用法の「た」に接続する事例に限定し、そこで得られた結果と考察について述べる。

２．先行研究

本節では、本稿で扱う否定疑問形式について言及した先行研究について述べる。なお、否定疑問形式の用法は〈〉、使用される場面は〔〕で示す。

＊ 國立政治大学外国語文学部　台湾台北市　kurosaki@nccu.edu.tw
＊＊ 山口大学　国際総合科学部　arimoto@yamaguchi-u.ac.jp
[1]謝辞：本研究の一部は、JSPS科研費　20K13048の助成を受けたものである。

２．１．ンジャナイ（ノデハナイ）について

安達（1999：131）は、「不確かさの表現としての「ノデハナイカ」の特徴は、話し手にとって判断を下すことができない状況で、「傾き」の存在によって話し手の見込みを聞き手に伝えるところにある」と述べており、筆者もこれに同意する。

本稿で扱うンジャナイは、田野村（1988）の分類するデハナイカⅡ類（推定を表す形式）に相当する。三宅（1996）では、デハナイカⅡ類は「命題確認の要求」といった用法を担っているとした。三宅（1996）は確認要求の用法を担うとしているが、（２）の用例では聞き手から「そうだね」という同意の返答を話し手が期待していると想定される。

（２）冷蔵庫にバナナあったんじゃない？

宮崎（2005）はこの用法を〈意見要求の問いかけ〉としているが、本稿では同意を求めているという点に着目し、〈同意要求〉と呼ぶことにする。

２．２．（ッ）ポクナイについて

（ッ）ポクナイについて言及した研究は、管見の限り見当たらなかった。そこで、肯定形の（ッ）ポイに言及している研究を挙げる。

森田（1989）は、名詞と共起し、その状態や傾向が表れて主体の属性を表す形式であるとした。また、小島（2003）も名詞と共起することを認めつつ、句や言い切り形の述語にも接続し、否定的な評価を伴う傾向にあるとした。

しかし、これらの特徴が（ッ）ポクナイにも当てはまるかは考える余地がある。例えば、（ッ）ポクナイは「今日雨っぽくない？」という予測を示す文や、「あの人子供っぽくない？」といった状態を推測する文で用いられるが、黒崎・有元（2021）では後者の用例においてクナイも容認度が高いことが判明した。また、前者でも西日本より東日本の方がクナイとの容認度が高いという地理的な差異も示唆された。これらは前接する語の語彙的な問題もあるかもしれないが、話し手の判断を示す否定疑問形式に使い分けがあるのならば、そこには文脈上の用法に違いがあると考える。

２．３．クナイについて

クナイは比較的新しい文末形式であるが、この用法について言及した研究として、平塚（2009）、高木（2009）、津村（2019）、黒崎・有元（2021）が挙げられる。これらの指摘内容を表１にまとめた。

【表１】クナイの用法に関する先行研究の指摘

	平塚(2009)	高木(2009)	津村(2019)	黒崎・有元(2021)
用法	同意要求に特化			
	「変（だ）」のみ〈否定〉で用いられやすい。	〈否定〉〈話し手の感情〉は表せない。 次の条件を満たせば，〈話し手の見込み〉を表す。 ①聞き手と話し手の立場が対等（だと話し手が考えている） ②判断の妥当性が追認可能な場面	〈否定〉でも用いられる。 断定的な言い方を避け，相手にやわらかい印象を与える一種のポライトネス表現。	「違う」「変（だ）」は〈否定〉でも用いられる。 〈話し手の見込み〉は，追認可能でなくても使用可能。 客観性よりも主観性に重きを置く。 西日本より東日本の方が，〈話し手の感情〉を述べる場面での容認度が高い。

どの研究においても、同意要求に特化した形式であるという点で共通している。〈否定〉の用法も見られるが、平塚（2009）や黒崎・有元（2021）の指摘にある通り、その使用には制限があるため、本稿では同意要求場面での用法の分析に限定した。

高木（2009）は、［話し手の判断を聞き手が追認不可能な場面］や［話し手より聞き手の方が多くの情報量を持っている場面］においては、クナイは使用できないと指摘した。しかし、黒崎・有元（2021）の調査では、同様の場面でも高い容認度が確認できた。このことから、クナイは話し手の主観的な判断を示す形式だといえるが、具体的な用法については不明な点が多い。なお、本稿における「主観的な判断」とは、話し手のみが持つ根拠に基づいて判断するものと定義する。

２．４．タ形の用法について

黒崎・有元（2021）では、アスペクト形式「テイル形」との共起関係から、話し手の主観的な判断を示すというクナイの用法を指摘したが、同様にアスペクト的用法を持つ「タ形」との共起については十分に調査できていない。

そこで、本稿ではタ形接続のクナイ・ンジャナイ・（ッ）ポクナイの異同について考察する。本節では、タ形の用法について言及した研究を概観する。

終助詞「た」ついては、寺村（1984）、尾上（2001）、定延（2004、2016）などによってその用法の分類がなされている。それぞれに細かな差異はあるが、主なタ形の用法は以下の通りである。

ａ．それは昨日言った。〈過去〉

b．やっと試験が終わった。〈完了〉
c．ここに財布があった。〈発見〉
d．そういえば、明日は彼女の誕生日だった。〈想起〉
e．わかった！〈事態の獲得〉
f．どいた、どいた。〈要求〉

〈過去〉〈完了〉〈発見〉〈想起〉では、話し手の意見は聞き手と共有可能である。否定疑問文は、話し手の意見を聞き手に伝え、それを聞き手と共有することを目的とすると考えるため、これらは調査対象となり得るだろう。一方、〈事態の獲得〉や〈要求〉は話し手のみが認識できることであり、聞き手とは判断結果を共有できない。そのため、後者の用法については調査の対象外とする。

3．調査方法

山口県若年層（山口県出身の18～20歳）51名を対象にアンケート調査を実施した。

調査方法は、先述の調査対象となるタ形を中心とした20の場面を想定し、クナイ・ンジャナイ・（ッ）ポクナイをそれぞれ用いた例文を見せ、どれだけ容認できるかを回答させた。回答項目は、「◎：使う」「○：使わないが聞いたことがある」「△：使ったことも聞いたこともないが違和感はない」「×：不自然」を用意した。女性の回答者が多かったが、今回は性差については考察しない。本稿では、紙幅の都合上〈発見〉用法に関する場面の例文を対象に分析を行う。その例文は、次節以降で適宜提示する。

4．分析

本節では、アンケート結果に基づく分析および考察について述べる。

4．1．情報量の違い

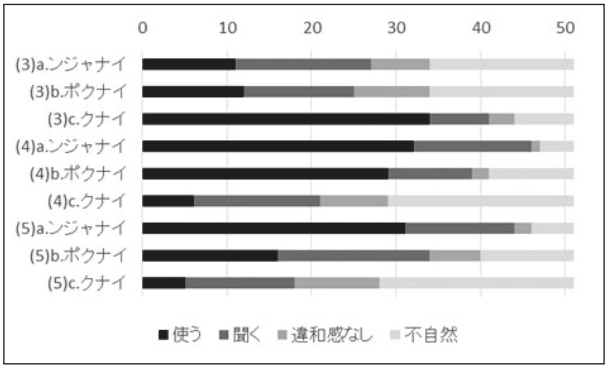
まず、話し手と聞き手の持つ情報量の違いによって、選ばれる表現に違いがあるようである。以下の（3）～（5）の例文を見られたい。

（3）［山中でサルの生態を複数人で調査中、木の上にサルらしき姿を見かけたがすぐに見失ってしまったので、同じ方向を見ていたであろう仲間に声をかけた。］
a．今さっき、あそこにサルがいたんじゃない？
b．今さっき、あそこにサルがいたっぽくない？
c．今さっき、あそこにサルがいたくない？

（4）［山中でサルの生態を複数人で調査中、とある木の下にサルが捕食したであろう木の実の残骸が落ちているのを見つけて、近くにいた仲間に声をかけた。］
a．ここにサルがいたんじゃない？
b．ここにサルがいたっぽくない？
c．ここにサルがいたくない？

（5）［Aさん・Bさん・Cさんと一緒に4人で山中でサルの生態を調査中、とある木の前にBさんとCさんが駆け寄り、木を観察したり落ちている木の実を調べたりし始めた。その様子を見て、Aさんに声をかけた。］
a．あそこにサルがいたんじゃない？
b．あそこにサルがいたっぽくない？
c．あそこにサルがいたくない？

アンケート結果に基づき、それぞれの容認度を図1に示す。



【図1】例文（3）～（5）の容認度

まず、クナイは（3）での容認度が最も高い。（3）は（4）や（5）と違い、話し手のみがサルらしい存在を確認している。つまり、［話し手の持つ情報量が聞き手よりも多い場面］ではクナイが使用されやすいといえる。

一方で、（4）と（5）では、ンジャナイ・（ッ）ポクナイともに容認度は高い。（4）では、話し手も聞き手も木の実を確認でき、（5）では、話し手も聞き手も人物BとCの両者の行動を確認できる。つまり、これらの同意要求表現は［話し手と聞き手の持つ情報量が同等の場面］で用いられるといえよう。しかし、（ッ）ポクナイは（4）よりも（5）の方が容認度は低い。これについては次節で述べる。

4．2．情報共有が可能な範囲

（4）と（5）は、話し手と聞き手と、発話場面にいる両者以外の人物との関係から、用法に違いが見えてくる。以下、発話の中心的存在である話し手と聞き手を「中心者」、発話場面にいるが話し手とも聞き手ともいえない両者の周囲にいる人物を「周縁者」と呼ぶ。

（4）は、中心者だけでなく周縁者も同等の立場で木

の実を視認している場面である。一方で、（５）は人物ＢとＣが木の観察や木の実の調査を始めた理由はその両者だけが把握しており、中心者にはわからない。つまり、（４）では中心者と周縁者との情報共有が可能だが、（５）ではそれができない。

以上を踏まえると、両者は［話し手の持つ情報量が聞き手と同等な場面］で使用できるが、ンジャナイは［中心者と周縁者で情報共有が可能な場面］で用いられやすく、（ッ）ポクナイは［中心者と周縁者との間で情報共有ができない場面］で用いられやすいということがいえよう。

４．３．話し手の確信度

話し手の何らかの判断を表明する否定疑問文において、その判断の根拠となるものが存在する。その根拠の妥当性を話し手がどう捉えているかという観点から、用法の違いを見ていく。

まず、（６）～（８）の例文を見られたい。

（６）［友人がＡ先生を探しており、自分も居場所は知らないが何となくトイレにいそうな気がしたので友人に声をかけた。］

ａ．先生なら、トイレにいるんじゃない？

ｂ．先生なら、トイレにいるっぽくない？

ｃ．先生なら、トイレにいるくない？

（７）［友人がＡ先生を探している時に、ちょうど向かいの部屋の窓からＡ先生らしき人影が見えるので友人に声をかけた。］

ａ．先生なら、あの部屋にいるんじゃない？

ｂ．先生なら、あの部屋にいるっぽくない？

ｃ．先生なら、あの部屋にいるくない？

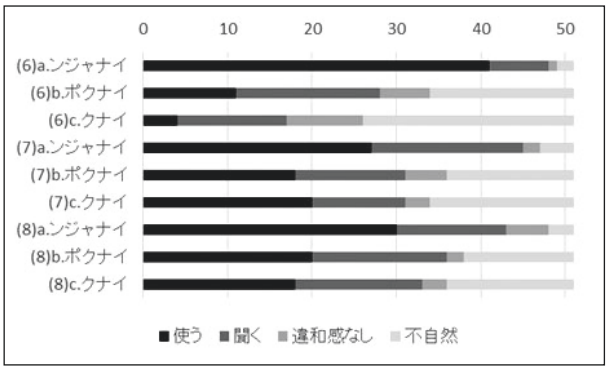
（８）［母が、お気に入りのマグカップを家でなくしたので一緒に探していると、テーブルクロスに円形の跡がついているのを見つけたので母に声をかけた。］

ａ．さっきまでここにマグカップがあったんじゃない？

ｂ．さっきまでここにマグカップがあったっぽくない？

ｃ．さっきまでここにマグカップがあったくない？

これら（６）～（８）の容認度を図２に示す。



【図２】例文（６）～（８）の容認度

まず、（６）と（７）を比較すると、（ッ）ポクナイとクナイの容認度は（７）の方が高い。（８）も（７）と同等程度の容認度である。（７）では、話し手は探索物である先生（らしき人影）を視認しており、（８）では、探索物に関わる円形の跡を視認している。一方で、（６）では、話し手は何も視認していない。このことから、（ッ）ポクナイとクナイは、話し手が探索物に関する情報を視認できた場合に用いられやすく、ンジャナイは視認できなくても用いられるといえよう。

しかし、これだけではクナイと（ッ）ポクナイの違いが判然としない。そこで、両者の容認度に違いが見られる図１の結果も合わせて考察する。

図１の結果を見ると、クナイの容認度は（３）では高く、（４）と（５）では低い。一方で、（ッ）ポクナイは（４）と（５）の方がクナイより高い。これは、４．１．で述べた通り、中心者が所持する情報量の違いが影響しているといえる。（３）において、話し手だけが探索物を視認したということは、その存在について話し手は強い確信を持っているといえよう。つまり、クナイは［話し手が強い確信を持って判断する場面］で用いられやすいと考える。話し手以外とは情報の共有ができないため、話し手の主観的な表現形式といえよう。

（７）も話し手だけが探索物を視認している場面であるため、クナイの容認度は高い。しかし、ンジャナイの方が容認度は高く、ポクナイの容認度も（３）に比べて高い。この違いは、話し手と聞き手の探索期間が影響していると考える。（３）は、話し手も聞き手も同じ調査チームであるため、探索を始めた期間は同等である。しかし、（７）は聞き手である友人の方が話し手よりも前に探索を始めており、探索期間は長い。こうした、話し手と聞き手における探索期間のずれが、クナイの使用条件に影響しているのではないだろうか。しかし、これは推測の域を出ないため、今後類似する場面の別の文でも確認できるか調査する必要がある。

次に（ッ）ポクナイの容認度をみると、（３）～（８）の中で（４）が最も高い。中心者の情報量が同じ

（5）と比較すると、（4）は落ちている木の実からサルの存在を推測しているのに対し、（5）は人物B・Cの行動からサルの存在を推測している。どちらもサルそのものを話し手が視認していないといという点は共通しているが、（5）において人物B・Cの行動理由は話し手にはわからず、サルとは関係ないことに起因するかもしれない。一方で、（4）は落ちている木の実からサルの存在を推測しており、それがサルの食べたものかどうかは調査を行うことで判断が可能である。このことから、（5）に比べて（4）の方が判断の根拠の妥当性は高いと言えよう。

（8）も同様に、円形の跡からマグカップの存在を推測しているが、それはコップや茶碗の跡かもしれず、探索物の存在の根拠としては弱い。

以上のことから、中心者が探索物に関する情報を視認した場合、その情報が探索物の存在を示すのに十分な根拠を持っている場合は（ッ）ポクナイが用いられやすいと考える。

最後に、ンジャナイは（3）をのぞいてどの場面においても比較的用いられやすい。この表現も（ッ）ポクナイと同様に、中心者が持つ情報量が同等な場合に用いられるが、その違いは、先述の通り話し手が視認していない場合に用いられる点にある。それに加え、（5）や（8）で容認度が高いことから、話し手の判断の根拠として十分とは言えない場合にも用いられる。

5．まとめ

以上、〈発見〉の場面において、タ形との接続を中心に山口県若年層の用いるクナイ・ンジャナイ・（ッ）ポクナイの用法の異同を見てきた。その結果を表2のようにまとめた。

【表2】クナイ・ンジャナイ・（ッ）ポクナイの用法

<table>
<tr><th></th><th>ンジャナイ</th><th>(ッ)ポクナイ</th><th>クナイ</th></tr>
<tr><td>情報量</td><td colspan="2">中心者（話し手と聞き手）が同等の情報を持っている場面。</td><td>聞き手より話し手の方が情報量を多く持っている場面。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">情報の共有範囲</td><td colspan="2">中心者で情報の共有が可能な場面。</td><td rowspan="2">話し手以外とは共有できない場面。</td></tr>
<tr><td>周縁者と中心者との間で情報の共有が可能な場面。</td><td>中心者と周縁者との間で情報の共有はできない場面。</td></tr>
<tr><td>話し手の確信度</td><td>弱い。
※話し手が探索物，または探索物に関する情報を視認していなくても使用できるため。</td><td>やや強い。
※話し手が探索物を視認していなくても，探索物に関する情報を得，それを聞き手とも共有できるため場面で使用できるため。</td><td>強い。
※話し手だけが探索物を視認しているため客観的に十分とは言えないが，話し手にとっては十分であるといえるため。</td></tr>
</table>

話し手の確信度については、「ンジャナイ→（ッ）ポクナイ→クナイ」の順で強くなると判断した。クナイは、話し手のみが探索物を視認できた場合に用いられるため、客観的には判断の根拠として十分とはいえないだろう。しかし、話し手自身にとっては自らの体験に基づくものであるため、強い確信を持って述べていると判断した。

一方、ンジャナイは話し手が探索物を視認できなくても使用でき、クナイのように話し手の主観的な判断を示す形式といえるだろう。しかし、クナイと異なり話し手以外の人物との情報共有が可能な場面で使用できる。これは、話し手自身も把握していないことを承知の上で聞き手に同意を求める形式だといえるのではないか。よって、ンジャナイが最も話し手の確信度が低いと判断した。

（ッ）ポクナイについて、今回の例文は全て促音がある「ッポクナイ」で例文を作成したが、促音がない方が容認度は高くなる可能性もある。そうした音韻的な問題については今後の課題とする。

また、今回はタ形接続を主に扱ったが、スル形やテイル形との接続においても用法に違いがあると予想される。また、形態的な問題としては、黒崎・有元（2021）において「クナイデスカ」の使用が確認できた。津村（2019）でも指摘されたように、ポライトネスの観点からも用法の異同を考察できよう。これらも今後の課題とする。

そして、今回は山口県若年層に限定したが、黒崎・有元（2021）で指摘したように、クナイの使用に方言による違いがある。そのため、今後調査地域を拡大し、クナイ・ンジャナイ・（ッ）ポクナイの用法の地域的な異同を記述する。

最後に、今回行った調査では、他にも例文を作成してアンケートを行った。今回は紙幅の都合上全ての結果を提示できなかったが、クナイに〈指摘〉の用法があったり、命題に関する話し手の知識量や経験量が、同意要求表現の使用に影響したりすることが確認できた。今後、これらを整理すべきである。

その用法の整理について、話し手と聞き手の持つ情報

量の差から、神尾（1990）の提唱する「情報のなわばり理論」に基づいて、内／外の関係からより詳しく分類することも可能だろう。本稿ではそこまで考察することはできなかったため、今後の課題とする。

本稿では、従来言及されてきたンジャナイに加え、比較的新しい（ッ）ポクナイやクナイといった同意要求表現の用法の異同を明らかにすることができた。これにより、新しい同意要求表現の文法的機能の解明に寄与できるだろう。

参考文献

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論　言語の機能的分析』大修館書店
黒﨑貴史（2021）「山口県若年層の用いる文末形式「～クナイ」について」『筑紫日本語研究2019・2020』pp.11-20　筑紫日本語研究会
黒崎貴史・有元光彦（2021）「西日本方言話者の用いる「クナイ」について」『山口大学教育学部研究論叢』第70巻　pp.273-282　山口大学
国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図　第３集』
小島聡子（2003）「接尾語「ぽい」の変化」『明海日本語』８巻　pp.31-38　明海大学
定延利之（2004）「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』21号　pp.1-68　神戸大学
定延利之（2016）『煩悩の文法［増補版］―体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法シンタクスをゆさぶる話』凡人社
高木千恵（2005）「大阪方言の述語否定形式と否定疑問文――「～コトナイ」を中心に――」『阪大社会言語学研究ノート』７巻　pp.73-87　大阪大学
高木千恵（2009）「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』第５巻４号　pp.１-14　日本語学会
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152号　pp.123-109
津村彩子（2019）「新しい接尾語「クナイ」の使用実態とその拡大について」『言語の研究』第５号　pp.１-16　首都大学東京言語研究会
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
平塚雄亮（2009）「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ（カ）」『日本語文法』９巻１号　pp.71-87　日本語文法学会
宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現―疑いと確認要求―』ひつじ書房
三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89号　pp.111-122　日本譜教育学会
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店